

須和田農園の歩み

園主 江尻光一



創業者・江尻宗三郎

昭和20年（1945年）9月26日は、豊橋にあった陸軍予備士官学校から市川の自宅に戻った日です。その翌日からぼろぼろになってしまった農園の再建に全力をあげ、今日に至りましたので今年（平成17年）は60周年記念になります。

私が農園を作ったのではなく、アマチュア園芸家だった父、宗三郎が昭和8年から10年をかけ、畑や田を求め、土いじりのための場所として趣味の農園を作りました。当時体調を崩していた父は植物好きだった為、医師から農園作りを勧められ知人から土地を入手しました。これが現在の須和田農園の誕生です。その頃は中山（中山競馬場のある町）に住んでいて、日曜ごとに父は農園に行っていましたが、5人いた子供たちが一人ずつ弁当持ちの当番をし、父のあとをつけて5~6kmあった道を歩いていったものでした。昭和15年頃の農園は10坪前後の温室が2棟、30坪くらいが1つ、あとは半地下式のフレーム温室が3つあり、カトレア、パフィオ（当時はシップと呼ばれていました）、デンドロなどの洋らん、温州素心、極品、大一品などの中国蘭、サボテン、ゴムの木、ゼラニウム等の鉢植えの観葉や鉢花が混在し、半地下式のフレームでは椎茸を作っていました。また畑にはグラジオラス（約600坪）、ガーベラ、天門冬、なるこゆり、水仙、ヒアシンス、チューリップ、クロッカス、アネモネなどを植えるほか、桃5本、梨3本、柿3本、ポポー2本、栗20本、梅5本、葡萄2本、グズベリー、ラズベリー各2本くらい、ユスラウメ等々あり、まさに趣味の農園でした。

これに加えて昭和21年以降は田も少しあったので稲を作り始め、畑では麦、大麦、陸稲、さつまいも、じゃがいも、里芋、それに各種の野菜類などを作らねばならず、はじめは私一人でしたので朝から晩まで大変な労働でした。むろん休みはなくその上食用として兎を10羽位飼っていたり、鶏を20羽前後飼っていましたから生活に夢中で農大へは10日に1回ほどしか行けず、これが原因で付けられたあだ名がオサボリマン！！

洋らんは当時日本人相手には切り花も株も売れず、もっぱら駐留していた外国人軍隊が対象でカトレアの切り花は1輪でも花屋さんが農園まで買いに来たくらいでした。これをコサージュにし軍隊に納めると花屋さんの売上は1輪で米2俵分（1俵は60kg）になった様で、当方は目を丸くしたものでした。

戦争で国がめちゃめちゃになった日本でしたが、日本橋三越での洋蘭展は昭和21年からスタートしています。もちろんほんの少しの鉢をデパートに展示するのみでしたが、人々は沢山見物に来、特に昭和26年か27年、ハワイの日系人からカトレアを主体とする蘭が、飛び始めたばかりの日本航空によって出品され、洋蘭とスチュワードスの写真が新聞に出るや、沢山の人々が狭い会場に殺到し、予防の為に作られた青竹の柵は音を立てて倒され、大変な騒ぎで、会場の整理係をしていた私はそのものすごさに圧倒されたものでした。



1960年4月の農園風景



1965年の農園風景



旧栽培温室（1964年）



洋蘭展で三笠宮妃殿下をご案内（1965年）



切り花の出荷仕立て（1963年）



展示温室内 (1965年)



旧3号温室 (1964年)



第12回世界蘭会議ディスプレイ (1987年)



グラスゴー世界蘭会議ディスプレイ (1993年)

こうした展示会に即売所ができたのは昭和29年からで、それまでは見るだけの洋蘭展でした。最初の即売ブースを受け持ったのは、大場蘭園と須和田農園の2つだったと記憶しています。私達の農園はそれ以後洋蘭展の即売所に出店していますから、今年でちょうど51年間販売している事になります。

昭和20年～40年位までの間は株分けによる繁殖だけの上、アマチュアによる需要も少ない為、デパートでひっそりと蘭展を行うだけでマスコミの関心もなく、切り花といえばカーネーション、バラ、菊が主体で、鉢植えはベゴニア、シャコバサボテン、観葉が中心でまだシクラメンブームもありませんでした。また全国の蘭園も数少なく、知る人ぞ知るといった具合でした。なお昭和30年から僅かずつ国際園芸の手により株や苗の輸入が始まり、やがてその開化した花を見てこれまでの洋らんととの差の激しさに皆驚いたものでした。昭和45年、フラスコ入りのシンビのメリクロン苗が業者間での売買が始まり、これ以来日本の洋らん界の姿は一変します。

須和田農園はこうした情報を早くつかみ、昭和40年頃からは交配による育種を目指し農園の小澤マネージャー(当時)の努力でスタートしました。生長点培養(メリクロン)には目もくれず、もっぱら交雑育種という手法で新品種作りを目指して今日に至っています。

確か初めての交配は昭和40年頃だったと思いますが、初期の交配は全てと言って良いほど咲いてガツガツの花ばかりでした。

洋らんの栽培園が次々と生まれたのが昭和50年の後半からで、メリクロンの普及がこうした大型蘭園を生み出していますが、当園は大量生産は行わず「亀の歩みのごとく」ゆっくりですが休むことなく新しい花を目指しています。

今までの主な入賞を思い起こすと、一番記憶に残るのが1987年に向ヶ丘遊園で行われた第12回世界蘭会議の展覧会です。金メダル1、銀が3、銅が6

それにトロフィー1と日本の洋蘭園としては一番多く入賞しました。その後1991年より行われている東京ドームの世界らん展でも、最高賞の日本大賞2回をはじめ多くの賞を頂いています。また日本で一番洋らん展の実績を持っているJOGA(日本洋蘭農業協同組合)の洋蘭展では高円宮妃牌をはじめ最高賞の農林水産大臣賞を10回受賞しています。

海外の出品についても、1993年のスコットランド・グラスゴーでの第14回世界蘭会議に出品をしシルバー4、ブロンズ2さらにトロフィーも受賞しました。このほかロンドン、ニューヨーク、サンタバーバラ、バンクーバー、コペンハーゲン、リオデジャネイロ、カラカス、ホノルルなどの洋蘭展へ出品、入賞し各地で高い評価を受けています。また昨年2004年に東京ドームの世界らん展で世界に誇る英国王立園芸協会(RHS)の創立200周年記念トロフィーを受賞しています。これは今まで前例がない賞で光栄の至りでした。こうした数々の賞が頂けたのも、須和田農園のスタッフの大きな努力と農園を支えてくださっている皆様のお力によるものと深く感謝申し上げる次第です。



ファミリーフォト (1965年)



農林大臣賞受賞記念写真 (1962年)
Blc.Yosooi 'Suwada'で受賞



農園スタッフ (1970年)